

草庵仁教

第234号
(発行日)

2009年12月1日

発行所：真宗大谷派念佛寺

〒6638113 西宮市

甲子園口2丁目7-20

電話・FAX (0798)

63-4488

(発行人) 土井紀明

mail:bachkantata2mubansou@zeus.e

onet.ne.jp

http://www.eonet.ne.jp/~souan/

《 開法会ご案内 》

○ 〈同朋の会〉

毎月22日午後2時

○ 〈念仏座談会〉

毎月2日および12日

午後3時より。

○ 聖典共学会 --- 毎月6日。

午後7時より。

* 8月22日同朋の会および8

月12日念仏座談会は休みます

浄土を願って生きる

小学生の五・六年の頃だっ

たと思う。その頃、家は小さな割烹旅館を営んでいた。年末年始になると忘年会とか新年会の宴会が時々あり、町のだんな衆のような人たちの宴会がよく行われていた。そして時には廊下からこうしたお客さんの声が聞こえることがあった。ある宴会の夜、芸者さんが招かれることがあり、

だんな衆の一人が芸者さんに「おい、花奴(その時の芸者さんの芸名)歌うたえ」と呼び捨てに呼んでいるのが聞こえた。その時、他者を人の面前で呼び捨てる行為に、幼い私であったけれど、何かイヤな感じがしたものである。

こういう光景は映画やドラマにも時々出てくるので、取り立てるほどのことはないかもしれないが、しかし悲しいものを感じた。

その後、高校時代になって、作家の倉田百三の本を読むようになり、その中で百三が第一高等学校の学生だった時

に、宴会の場に出席したこと

が書かれていた。その宴会に芸者さんが何人か来ていた。その時、同級生の者は彼女たちを呼び捨てで呼んでいたが、百三はどうしても呼び捨てで呼ぶことができなかったと、告白的に書いていた。それを読んで私は百三に大変同感したものである。

その頃の私が「職業によって人を差別的に見、差別的な態度をとることは間違っている」というような理論づけは勿論できなかったであろうが、身近でない他者を呼び捨てにするような光景に接して「イヤだなあ」という感覚をもったことは間違いない。

これに類することはそれ以後、何度も見聞きしてきたし、そのつど幾分悲しさをおぼえてきたのである。もともと私もそのだんな衆と同じような態度をおりにつけ他者にとってきたと思う。

この世はこういう差別的な

人間関係がいたるところにある。それを日常的に見聞せざるを得ないし、私もそういう差別社会を形成してきた一人だろうと思う。

人を職業や財産の有無や学歴や資質や家柄や出身地や人種などの違いによって優劣をつけ、差別的な扱いをすることに対し、誰も本当はそういう状況を見るのは、イヤなことであり悲しいことではな

かろうか。幼い頃、そういうイヤな気持ちが起こったということは今から思うと、人が人を差別する人間関係ではなくて平等な人間関係を願う心が中心に動いていたのだと思う。

私たちのいのちの底にはお互いが差別されない、平等な人間関係を願う気持ちが流れているし、それを消すことはできない。そういう人間関係が実現するような社会に少しでもなることを願っているのだと思う。(そういう願いが私の心に起こるのは、浄土からの働きがまずあるからである)

ところが現実の社会はいつまでもそうはならない。いろんな人間的な差別が大小さまざまな形で行われている。はたして平等な対他関係が実現しているような世界はないものだろうか、あるいはこないものだろうか。

そういう世界はある。それはこの世を超えて浄土としてすでに成就されている。それを知らしてくださるのが浄土の経典である。

浄土に生まれば肉体的な形を持たず、形のない無量のいのちとなると説かれている。

何らかの形を持ち、たとえば人間という肉体を持ち、それを「私」とか「私のもの」と執着する、そこにあらゆる差別の因があるといえる。(我と執し、我が体と執し)て、我を立てて、他者と比較分別しやりとりをすることでいろいろな差別のみならず、争いや貪欲が起こるのである。

だから、そういう限定された(形あるいのち)から解放されて、形のない(はかりなきいのち)になる、あるいは

（はかりなきいのち）とさ
る、それが浄土に生まれた聖
衆の徳であるといわれてい
る。

このようにして、浄土の聖
衆の間には差別的な関係はな
く、ひとりひとりが形のない
いのちでありつつ、個性的で
あると、浄土の經典には説か
れている。浄土の仏・菩薩な
どの聖衆には真実の平等な関
係がそこには実現しているの
であろう。

この世で人と人が差別的な
状態であるのを見て悲しく感
じ、イヤに思うのは裏を返せ
ば平等な世界を願っている、
いわば「浄土を願っている」
のである。ただ浄土の世界
を願う心が私たちの心に自覚
されていないだけである。

けれども仏の説法を聞くこ
とによって、浄土を願う、浄
土を願って生きようとするこ
とが芽生えてくるのである。
*
そして、さらに一言すれば、
浄土を願って生きることと現
実の差別の世界とはどういう
関係になるのかということだ
ある。

くならないであろう。

この世の未来にそういう理
想世界を人間の運動だけで実
現しようとする企てもある
が、それはとかく、遙かなる
未来に理想社会を夢見るだけ
か、あるいは失望に終わるか、
または強制することによって
更にこの世を悪くする場合が
多い。

浄土はこの世にはないが、
この世を超えてすでに成就し
ている、と仏陀は説いてくだ
さっている。そしてその浄土
のはたらきはこの世の人々の
心に働きかけていてくださ
る。

私どもが浄土を願って生き
ていくところにすでに浄土の
光が私どもの心にはたらきか
けてくださっているのである
。浄土の光は、私どもをし
て、人間差別の世界を痛み、
差別の状態を少しでも少なく
することを志向しつつ生きる
ことへと促したもうのでは
なからうか。

先人が「この世を浄土にす
ることはできないが、浄土の
光のはたらきに帰し浄土の徳
を映すことはできる」といわ
れた。そういう希望をもって
生きたいものである。（了）

正信偈に学ぶ問答

(一一一)

本願名号正定業
至心信樂願為因
成等覚証大涅槃
必至滅度願成就

書き下し文

（本願の名号は正定の業なり。
至心信樂の願を因とす。等覚
を成り、大涅槃を証すること
は、必至滅度の願成就なり）
現代語訳

（本願成就の名号は衆生を間
違いなく往生せしめたもう行
であり、至心信樂の願（第十
八願）心が信心として衆生に
とどいて往生の正因となる。
正定聚のくらしいにつき、浄土
に往生してさとりを開くこと
ができるのは、必至滅度の願
（第十一願）が成就されたこ
とによる）

D 「この四句は正信偈の中心
部分と言っているかと思いま
す。真宗の教えの基本がこの
四句に摂められています」
G 「まず（本願名号は正定の

業なり）についてですが、本
願名号とは何ですか」

D 「阿弥陀仏の本願によつて
誓われた阿弥陀仏の名のこと
でいわゆる南無阿弥陀仏のこ
とです」

G 「南無阿弥陀仏のことを本
願の名号というのですか」

D 「ええそうです。南無阿弥
陀仏は単なる阿弥陀仏の名で
はありません。阿弥陀仏の本
願が名となった、そういう仏
名です」

G 「本願名号の本願とは」

D 「この場合の本願とは、無
量寿經に説かれている法蔵菩
薩の四十八通りの誓願の中の
第十八願のことです。その中
の（乃至十念・若不生者・不
取正覚）と誓われたお念仏の
誓いのことです」

G 「乃至十念・若不生者・不
取正覚の誓いとは」

D 「（乃至十念するもの、若
し生まれずは正覚を取らじ）
との誓いです。乃至十念とは
詳しくは（称我名号・乃至十

念）ということ、（わが名

号を称えること、十念（声）
に至るに及ぶまで」という意
味です。ですから（十声なり
とも我が名と称えるばかり
で）と仰せられ、（もし生ま
れずば正覚を取らじ）で、必
ず浄土に生まれさせる、もし
それが出来ないようなら私は
仏にはならない、と誓われた
法蔵菩薩の誓願です。これを
念仏往生の誓いと申します」
G 「（我が名号を称えるばか
りで助ける）と誓われたその
誓願と名号の関係はどうなの
ですか」

D 「名号と誓願の心とは、た
とえば肉体と心のように離れ
ないのです。肉体のない心は
観念でしかなく、心のない肉
体はありません。そのよう
に南無阿弥陀仏の名と阿弥陀
仏の願心とは一体不二であり
ましょう。あるいはたとえ
赤ちゃんと与える母親の母乳
が母親が赤ちゃんとそそぐ愛
情のように、南無阿弥陀仏の
乳は母親の愛情と離れず、む
しろ母親の愛情が形を取った
ものが乳である、そのように
阿弥陀仏の大悲の願心（親心）
と南無阿弥陀仏の名号（乳）
とは不離一体であるといわれ
るのです」

*

G 「我が名号を称えるばかりで助ける」とは私たちがお念仏を称えたら助けてくださるといふことですか」

D 「いいえ、へ称えるばかりで助ける」とのお誓いは、へ称えたら助ける」といふような、人間の側に称えることを要求し、称えるならば助けてやろうという、いわばお念仏の行は人間の側の行いとし、それを条件に助けるのは阿弥陀仏の側であるという意味ではありません」

*

G 「ではどういふ思し召しですか」

D 「へ口にただ称えるばかりでまるまる引き受けて助ける」といふことで、全面的に私どもを引き受けて助けるという広大な大悲を表したもう仏のお言葉なのです。ですから、私の方でお念仏をどれだけ称えねばならぬというような話ではありません」

G 「なぜ阿弥陀仏はへただ口に称えるばかりでまるまる助ける」と仰せられるのですか」
D 「それは私たちの側に、仏になることができるような真実がまったくないことを阿弥陀仏は知り抜き給い、それゆ

え私どもの心には何も要求せず、私のありべのままにまるまる救おうとされた、そのお心をへ我が名を称えるばかりで」と表されたのでありますよう」

*

G 「人間の心に真実がないとは」

D 「凡夫の心にあるのは煩惱と煩惱まじりの善心しかなく、純粹な善心は一つもないということでしょう」

G 「善心があつても煩惱がまじっているのですね」

D 「ええ、たとえ人に親切をするような慈悲の心があることも事実ですが、人に親切をする心にも、それを行って自分が認められたいとか、お返しを求めるとか、あるいは善行を誇るとか、自分が善人であることを確認したいとか、人によく思われたいとか、そういう自我の心がついてきますから、純粹な慈悲心や善心は凡夫にはないと阿弥陀仏は見られたのではないでしようか」

G 「では、そういう煩惱まじりの善は無意味のですか」
D 「いいえ、こうした善が無意味というのではありません。この世を生きていく上に

はやはり善は善であつて、悪よりは善いことでもあります。

ですから、その煩惱まじりの悪が伴っていることを反省しざんき慚愧しつつ、行われるべきものであります」

G 「人間的な善は行われるべきものですね。そしてその善を行う時には、その善に伴う煩惱を反省し慚愧しつつ行うことが望ましいのですね」

D 「ええそう思います。自分の自我に無反省なまま、善を行つても、それが本になつて腹を立てたり、相手を憎んだりして、争いの因になることもしばしばありますから」

G 「そうですね」

D 「それに、どこまでも人間的な善では浄土に生まれることはできないと説かれています。人間的な善の行いは人間世界よりもさらに苦しみの少ない天上界に生まれる因にはなると、教えられています。」

G 「天上界とは」

D 「天とは神さまのことで、天上界とは神々の世界であり、人間界よりも樂の多い世界といわれます。しかし、まだ迷いの境界であつて、また苦しみの世界に転落する可能性がある境界といわれています」

す」

*

G 「人間の心には煩惱と煩惱まじりの善心しかなく、こうした人間の心で行う修行では仏になることはできないと阿弥陀仏は見られているのですね」

D 「ええ、ですから衆生が仏になる因は阿弥陀仏の方で、法蔵菩薩となつて私どもに代わつて御修行くださり、仏になる因をすべて仕上げてくださいましたのです」

G 「それは私たちが仏になるような真実がまったくないと知り抜かれて、その私たちがどこまでも助けたい、仏にしてやりたいという大慈悲のお心からなのですね」

D 「ええそうなんです。それでへお前が仏になる因はすべて我が方で仕上げた。お前をそのままなりで助ける、引き受けてやる。助けさせてくれよ」といふ広大な慈悲心を私たちに知らせたもうお言葉が

へ乃至十念・若不生者・不取正覚」といふお言葉として十八願に示されているのでありますよ」

G 「といふことはへ我が名を称えるばかりでよい」とはへそのままなりで必ず助ける」

という広大な大悲の仰せなのですね」

D 「ええ、その大悲の誓いが一声一声の南無阿弥陀仏の名号に表れているのです。もう一ついえば、大悲心そのものが南無阿弥陀仏の名号になつているのです」

G 「そうすると、南無阿弥陀仏は私たちにとつては、私たちが称えて何とかしてくださいと要請するものではなくて、南無阿弥陀仏と称えるのであるけど、お念仏の声はへそのままなりで助ける」という大悲の喚び声なのですね」

D 「ええそうです。南無阿弥陀仏そのものが大慈悲の喚び声であり、誓いの御名です。ですから南無阿弥陀仏は称えものではなくて聞きもの、お聞かせいただく名なのです。そこで阿弥陀仏は私たちに南無阿弥陀仏の御名を私たちに与えて聞かせたいと願われて起こされた願が法蔵菩薩の第十七願なのです」 (了)



七電

仏法聴聞の心得

話であるかどうかは、信心がいただけ

真宗の教えを聴聞しているお方から、「なかなかご信心がいただけません」とよくお聞きします。なぜいけないのか、それは縁が熟してないからといえますが、しかし聴聞する私たちの側にも問題があると思います。

一つは、仏法聴聞はただ漠然と「いいお話」や「有難いお話」を聞かせていただくのではなく、課題の一つに集中して聞かせていただくことであります。蓮如上人は、「後生たすけたまえと弥陀をたのめ」とか「自力の心を捨てて弥陀をたのめ」など、一心に弥陀をたのむ一つに焦点を合わせようにご教化されました。

聴聞する側は、「なんとか信心をいただきたい」「弥陀をたのみたい」「阿弥陀仏にいたい」「不安な死の問題を解決したい」「死んで私はどこへいくのかを解決したい」など、聴聞にも一つの目的をもって聞かせいただくことが大事だと思えます。

そして、真宗の教えを聞く場合、(正当で正確な)浄土真宗の教を聞かせていただくなくては、あらぬ方向にうろうろと迷いこんでしまいます。

ただ、それが正当で正確な真宗のお

ていない場合は判断がつきにくいものです。その場合は、称えているお念仏にぴったり合う話はまず間違いない真宗のお話(本願念仏のお話)であるといえましょう。もしお念仏にぴたり合わないお話なら、それは称えているお念仏そのものが自然と淘汰して下さいます。

また、なんととっても熱心に聞くこととです。真宗は他力の教だから、努力しなくても助かるなどというのは間違いで、真剣に念仏聞法すべきであります。棚からぼた餅というわけにはいきません。

後生の一大事といわれるのは、永き生死流転を超える(一大事)であって、世間のことが第一で、仏法は二の次三の次ぎぐらいに考えていてはなかなか信心をいただくことは難しいのではなないでしょうか。一代の名師といわれた香樹院徳龍師が「これ一つ聞きつけずばおくまいおくまいの心がゆるんだら仏になる種を失うたと思え」とまで厳しく仰せ下さっています。実際そうだと思います。

最後に、真宗の聞法はひごろお念仏を申しつつなされるべきだと思いま

す。なぜなら、聴聞は何を聞くのかというところ、(お念仏のいわれ)をお聞かせいただくことです。ですからお聞かせいただく対象は南無阿弥陀仏であり、その南無阿弥陀仏は具体的にどこに示されているかというところ、称えているナムアマミダブツの声のところに表示されています。

もし南無阿弥陀仏の声がなければ、お念仏のいわれを聞いても、具体的な南無阿弥陀仏がありませんから、観念的になりましょう。それゆえ日頃お念



風流傘
(C)SHOGAKUKAN
INC.

仏を称えつつ、称える念仏のいわれをお聞かせいただくというのが、仏法聴聞の本筋であります。

助かりたいと願って、お念仏を称えながら、熱心に聴聞するならば、「いかに不信なりとも、聴聞を心に入れて申さば、御慈悲にて候うあいだ、信をうべきなり」と

蓮如上人が申されておられるように、信心などとてもいただけない私に、如来様の不可思議な御

慈悲の力が加えられて、信心をたまわるのであります。(了)

《任職雑感》

この前、「天皇陛下が天皇になられてから、一番印象の深かったできごとは何ですかと尋ねられた時」、陛下が「国際的な事件ではベルリンの壁が崩壊したこと、そして国内では阪神大震災です」と答えられたが私も同感である。ベルリンの壁が崩壊した当時、私も社会主義の国々がこれほど早く体制が崩れたことに驚いたからである。また、震災は極めて身近に経験した強烈なできごとであった。今年はどうか。それは先の二つの出来事と比べるとインパクトは少ないにしても、自民党政権から民主党政権に移行したことは大きな出来事だっと思う。二大政党の実現で、日本もやつと民主主義が地に着き始めたことを実感した。これまで、ヨーロッパ先進諸国の政治体制には及ばないもどかしさがずっと続いていたからである。民衆の合意で政権の移行が可能であることを実感した意義は大き

《念佛寺報恩講》

十二月二十二日(火)午後二時始まり

講師 大阪・浄永寺住職 矢幡和男師

平成22年度御年忌年回表

1周忌	平成21年亡
3回忌	平成20年亡
7回忌	平成16年亡
13回忌	平成10年亡
17回忌	平成6年亡
23回忌	昭和63年亡
27回忌	昭和59年亡
33回忌	昭和53年亡
50回忌	昭和36年亡

(23回忌と27回忌をせずに25回忌にいと
なむ数え方もあります。また50回忌以後は5
0年ごとになります)